



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	月刊DRF 第26号増刊
Author(s)	デジタルリポジトリ連合; Digital Repository Federation
Description	事務局: 北海道大学附属図書館 http://drf.lib.hokudai.ac.jp/ で公開したもの
Issue Date	2012-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/73513
Type	journal
File Information	DRFmonthly_26s.pdf





月刊 DRF

Digital Repository Federation Monthly

第26号増刊

No. 26 Special Issue. March, 2012

【特集1】オープンアクセス出版とは
【特集2】「OAメガジャーナルの興隆」

月刊DRF・jusmine
共同編集特別企画

特集1 オープンアクセス出版とは

オープンアクセス出版とは、BOAI(ブダペスト・オープンアクセス・イニシャチブ)が提案するオープンアクセス実現の2方策のうちのひとつです。

- ・BOAI-1 (GreenRoad) セルフアーカイビング
- ・BOAI-2 (GoldRoad) オープンアクセスジャーナル

オープンアクセスジャーナルは、購読契約を経ないため雑誌契約業務の対象として現れることはありません。また、通常冊子体を持たないオンラインジャーナルであることから、従来型の図書館目録の対象となることはありません。

しかし、そうした大学図書館業務の視界の外で、質(PLoS Biologyは生物学分野インパクトファクター首位)・量(メガジャーナルの勃興)ともに際だったジャーナルが成長してきていることに、もう私たちは無頓着でいることはできないでしょう。学術情報流通のコスト負担は、図書館資料費から研究費(APC支出。後述)へとシフトしていくのでしょうか。さまざまな意味で、大学図書館がオープンアクセスジャーナルにどう向き合っていくか、議論を深めていく必要があるでしょう。



<歴史と現在>

1990年前後に発刊された『Psychology』、『Electronic Journal of Communication』などが初期のオープンアクセスジャーナルと考えられています。その後、オープンアクセスジャーナル専門の出版団体であるBioMedCentral、PUBLIC LIBRARY of SCIENCE (PLoS) などからも本格的に刊行が始まりました。一方で、既存の学会や商業出版社もオープンアクセスジャーナルの出版に参入してきています。その代表的なものとして、2010年にはSpringer社がオープンアクセスジャーナルのシリーズSpringerOpen(現在75誌)を立ち上げたのは記憶に新しいところです。

<ビジネスモデル>

オープンアクセスジャーナルの代表的な形態は「著者負担型」と呼ばれるものです。論文を投稿する著者は、掲載が決まると同時に、出版社に対し、APC(Article Processing Charge(論文出版加工料))を納付します。出版社はこれによって出版コストを支え、結果的に、無料の電子ジャーナルとして公開します。(※従来型有料誌との中間的な形態としては「ハイブリッド・ジャーナル」というものがあります。著者が、APCを負担し、オープンアクセス出版を選択した場合にのみ、有料誌中その論文だけが無料公開されるというものです。が、しかし、これは過渡的な形態と見る見方もあります) 代表的なオープンアクセスジャーナル出版者のAPC設定を右表に示します。

出版者 * =Hybrid OA	APC
BMC	標準\$1,940
APS *	\$1,700-2,700
APS "Physical Review X"	\$1,500
BMJ Unlocked *	\$2,220-3,145
BMJ "BMJ Open"	\$1,900
Elsevier *	\$3,000-5,000
Hindawi	\$400-1,500
NPG *	\$2,500-3,900
Nature "Nature Communications" *	\$5,000
Nature "Scientific Reports"	\$1,350
Oxford Open *	標準\$3,000
PLoS	\$1,350-2,900
Royal Society EXiS Open Choice *	\$2,380
Royal Society "Open Biology"	\$1,932
SAGE Choice *	\$3,000
"SAGE Open"	\$695
Springer Open Choice *	\$3,000
SpringerOpen	\$665-\$1,996
Taylor & Francis Open Select *	\$3,250
Taylor & Francis Open	未定
Wiley-Blackwell OnlineOpen *	標準\$3,000
Wiley Open Access	\$1,850-3,000

表: 西園由依. APC比較 (SPARC Japanセミナー発表資料)

<品質>

無料公開のジャーナルとはいっても、その品質は有料誌に全く劣りません。例えば、生物学分野のPLoS Biologyは、同分野の有力誌86タイトル中、第1位のインパクト・ファクター(12.472(2010年)トムソン・ロイター社による)を誇ります。

<オープンアクセスメガジャーナル>

2006年、PLoSは、既発6誌に加えて新たなオープンアクセスジャーナル「PLoS ONE」を発刊しました。PLoS ONEは独特の軽量の査読・編集工程により、大量の論文を速やかに刊行するという特徴を持ち、2011年には1年間だけで約14,000報の論文を出版しました。同様の特徴を持つオープンアクセスジャーナルは、現在他の出版者からも刊行され、「オープンアクセスメガジャーナル」と呼ばれています。特集2では、PLoS ONE出版代表Peter Binfield氏を招いて開催された第5回SPARC Japanセミナー「OAメガジャーナルの興隆」(平成24年2月29日)をレポートします。

特集2 第5回SPARC Japanセミナー2011

平成24年2月29日(水)13:00~17:00 国立情報学研究所にて、第5回SPARCJapanセミナー「OAメガジャーナルの興隆」が開催されました。リほこがレポートします。

今回のセミナーはDRFが企画・協力を行い、DRF WGメンバーの近藤喜和氏(奈良先端科学技術大学院大学)が総合司会を、杉田茂樹氏(小樽商科大学)が開会挨拶を行いました。



1. オープンアクセスジャーナルとは 西蘭 由依(DRF, 鹿児島大学附属図書館)

現状と特徴を紹介

オープンアクセス(OA)ジャーナルの第一の特徴である、論文出版加工料(APC)について紹介。算定方法、各出版社のAPC料金の比較が興味深い。さらに、OAメガジャーナルでは、「カスケード査読」という方法を採用していることを紹介。これは、査読を引き継ぐことによりコストを削減するもので、例えば、A誌に投稿された論文を査読して掲載不可となった場合、同じ出版グループのB誌を紹介することがあるが、そこへ投稿された場合にはA誌での査読を生かして使うというもの。最後に、インパクトファクターが高いほどAPCが高いという関連性、購読モデルにはいまだ根強い信頼があることを指摘した上で、OAの今後について、研究者の関心はどうか、質の保証・評価指標はどうするのか、誰がコストを負担するのか、と問題提起した。

2. PLoS ONEにおける日本著者論文 佐藤 翔(筑波大学大学院博士後期課程図書館情報メディア研究科)

PLoS ONE掲載日本著者論文は潤沢な資金による研究が多い

PLoS ONEに掲載される論文数は日本は7位(5.1%)。論文数は安定して増加しているが割合はずっと5%前後。他の一般的な雑誌と比べて、国際共著は多少多いが、論文数の割合も発表論文数上位機関もほとんど変わらない。ただし、助成金獲得状況(2011年)については、はっきりとした特徴が出ている。Web of Scienceのアナリシス機能によれば、日本発論文のうち58.8%の論文が助成金を獲得しており、助成件数は平均1.4件であるのに対し、PLoS ONE論文は94.6%で平均2.4件である。PLoS ONE論文の著者は潤沢な資金を持っているといえる。資金があるから投稿するのか？資金をとったからには成果を出さなければならないからか？掲載料の負担が投稿率に影響するのだとすれば、誰がコストを負担するのがよいのだろうか、と結んだ。

4. パネルディスカッション 【モデレーター】

土屋 俊(大学評価・学位授与機構)

【パネリスト】

アントワン E. ブーケ(NPG Nature Asia-Pacific)
山下 幸侍(シュプリング・ジャパン)

(3ページ目に続く)

ブーケ氏：

2010年発刊のNature Communicationsはハイブリッドジャーナルで厳格な査読を実施し高品質を目指している。カスケードモデルを採用、社内ではPSingと呼んでいる。(メールの追伸で他誌を紹介するため)2011年7月にScientific Reportsでメガジャーナルに参入。「Nature」だけでなく幅広い分野をカバーするため「Nature」を冠していない。他社のメガジャーナルとは、優れた科学者コミュニティであるnature.com上で公開していること、様々な形態のジャーナルがあり、著者の自由度が高いという点で、差別化できると考えている。

山下氏：

Springer社の2000タイトルは全てハイブリッドジャーナルで、そのほかBioMed Centralを含め280のOAジャーナルがある。これらの中には70の学会誌があり、これが全部メガジャーナルで代替されるとは思えない。新しい領域が出、新しい学会ができ、新しい学会誌ができる、この循環は止まないだろう。だからPLoSの予想に対しては、BMCの社員は全員賛成するだろうし、Springer社員は有り得ないと答えるだろう。どちらに転んでもOKだ。メガジャーナルSpringer Plusは誕生したばかりだが、カスケードの受け皿としてではなく新しい雑誌として育てている。

土屋氏：
学術情報流通の今後について、様々な可能性があると、新しいことが始まる予感を感じてもらえたと思う。



「OAメガジャーナルの興隆」(平成24年2月29日)

3. PLoS ONE とオープンアクセスメガジャーナルの興隆 ピーター ビンフィールド(PUBLIC LIBRARY of SCIENCE)

OAジャーナルが購読モデルにとって代わる日も近い。現存有料誌の9割は無くなる。

PLoSは2000年に設立、2003年から出版活動を開始した。現在OAジャーナルを7つ持っている。このうち、PLoS Biology と PLoS Medicine の2つはプロが厳格に査読するジャーナル、4つはコミュニティジャーナル、最後の1つがOAメガジャーナルPLoS ONEだ。メガジャーナルの先駆けとして2006年12月に発刊し、5年たったところである。

PLoS ONEの特徴は編集プロセス。全部にピアレビューを行うが、科学的に健全かどうか、つまり倫理的であり、データによって結論が導かれているか客観的にチェックするのみ。他への影響、科学の進展につながるか等はチェックしない。これらは主観的なもの。なお、カスケード査読は採用していない。他のジャーナルから回ってくるのは5%にも満たないからだ。評価は出版後にされるべきと考える。ユーザによるスコアリング評価、オンライン評価ツールを提供している。

著者への調査により、投稿先として最初にPLoS ONEを選んだのは全体の著者のうち40%を超えていることがわかった。最初か2番目は73%。満足度も高い。論文掲載数は、2007年1,200件(99.7%の分野をカバー)、3年後6,700件で最大のジャーナルとなった。2011年は14,000件。PubMedの1.5%を占める。インパクトファクターについて急激に伸びた。

最近、真似する出版社が増えた。PLoS ONE クローンと呼んでいるが、このうち興味深いと思っているのは次の4つ。()内が理由。

1. **Scientific Reports** (ネイチャーが出していること)
2. **Springer Plus** (規模が2000本と大きい、APCが1,000ドルとPLoS ONEより350ドル安い)
3. **TheScientificWorldJournal** (購読ベースのジャーナルだったがHindawiが買収してOAとなった。だからIFがついている)
4. **SAGE Open** (社会科学分野である、APCが695ドルと安い)

PLoS ONEはクローンを歓迎する。ともに切磋琢磨して発展していくと出版界が劇的に変わるだろう。2万5千のジャーナルがあるが本当に必要なのは、つまり5年後に残るのは100ジャーナルくらいじゃないだろうか。OAジャーナルが購読モデルにとって代わる日も近い。

PLoS ONEの成功は、インパクト、アセスメントは別にして出版できることを証明した。今後は出版後のメカニズムに関して注目されることになるだろう。例えば、限られた数のOAメガジャーナルとOAジャーナルから基本的な質だけを保証してたくさん出る、クラウド状のコンテンツに対して使えるサービスを提供していくこと等。オソロシイ未来図に思えるかもしれないが、研究がより促進されることは間違いない。



(4. パネルディスカッション 2ページ目からの続き)

ピーター ビンフィールド(PLoS) 大澤 類里佐(DRF, 筑波大学附属図書館) 安達 淳(国立情報学研究所)



ビンフィールド氏:
2017年には半分が、
2020年には90%が
OAメガジャーナル掲載論文に
なるだろう。
研究者がPLoS ONEを選ぶ理由
は、①インパクトファクター、②早
く出してくれること、③ブランド。
OAであることはだいじ下。効率
の良さがつまりよいサービス。

大澤氏:
「この状況で機関リポジトリをやっているのか？」という思いに駆られてきた。最近、研究者は、ジャーナルではなく論文を読んでいると感じる。ブランドはジャーナルではなくパブリッシャーになりつつあるのではないかな。



安達氏:
税金で行った研究はOAに、と言っていたステージから、いまや「儲かるビジネス」になったと言わざるを得ないと認識を新たに。「研究者が適切に研究をし、それを公開する雑誌」「純朴な研究者と強欲な出版社」という、これまでの単純な構図から、巧妙な、分かりにくい構図に変化したと感じる。投稿先ジャーナルの選択については分野によって風土がかなり違う。メガジャーナルが馴染まない分野もあるのではないかな。メガジャーナルはデータや情報を大量に提示するが、学問のその先、knowledgeやwisdomの向上に寄与できるのだろうか。



特集2 第5回SPARC Japanセミナー2011(続)

会場からの質問にパネリスト全員に「YES」か「NO」で一斉に答え、その理由を順番に説明する方式で進みました。

Q. 査読は残る？

A. 全員YES



Q. APCの値下げはある？

A. PLoSのみYES！

(ただし、Springer は、
値下がり後に自然増に
転ずるとの予測により
「NO」を上げました。)



他に、Q.「OA論文が増えると言うのは購読料モデルが減るからか？」、Q.「OAメガジャーナルの台頭により、学術研究の質は向上する？」という質問があり、これに対して両方ともに、PLoSが「YES」、NPGとSpringerは「NO」という回答でした。

ピーター・ビンフィールド氏から、『jusmine』『月刊DRF』読者へのメッセージ



—数年のうちに、数々のメガジャーナルがPLoS ONEのような成功を遂げる。そして、世界中の研究論文が、相当の割合でそこに集中する。うまくいけば、メガジャーナルは、学術雑誌オープンアクセス化の最強最速のモデルとなるのではないだろうか。

Open Access Megajournals (which, by definition, can become extremely large) are a recent development which look set to dramatically change the journal publication landscape. The most successful example of an OA Megajournal is PLoS ONE (just 5 years old, but already publishing approximately 1.5% of the Scientific literature) and that success has not gone unnoticed by many of the more established publishers who are rapidly launching similar journals. If we assume that even more of these Megajournals will launch in the next few years, and if we assume that at least some of them will be as successful as PLoS ONE has been, then it is clear

that we could soon reach a point where a significant portion of the literature is being published in a small number of extremely large Open Access titles. If this happens, then it is possible that OA Megajournals actually represent the most powerful and rapid way to transition the journal literature into a fully Open Access model.

今回は、みんなのJUSTICE通信「jusmine」編集部との共同編集でお送りしました。オープンアクセスジャーナルにどう向き合うかは、機関リポジトリ担当者、雑誌契約担当者、それだけでなく、大学図書館の多くの部署にまたがる課題ですね。全館回覧だ！

編集
後記

月刊DRFでは、みなさまからのお便りをお待ちしています。gekkandrf@gmail.com

<http://drf.lib.hokudai.ac.jp/gekkandrf/>

月刊DRF第26号増刊 平成24年3月22日発行 デジタルリポジトリ連合



本セミナーに参加した図書館関係者の感想です

土屋 俊(大学評価・学位授与機構)

PLoS ONEが出る前ですら、電子ジャーナルの普及ですでに研究支援機能の終焉という大学図書館の運命は決まっていた。

あとは、機関リポジトリぐらいしか仕事がない(学習支援を除けば)と思っていたが、OAメガジャーナルになると論文(OA)保管庫・発信所としての機関リポジトリも不要になることが明らかになった。OAメガジャーナルは図書館に対する脅威にすぎないことが大変よくわかった。



近藤喜和(奈良先端科学技術大学院大学)

Gold OAでは「著者がAPCと論文を出版社に提出し、出版社が論文を全世界に公開する」モデルなので、その中での図書館の役割がまだ見えません。図書館がそのAPCを管理する役割をするのでしょうか？私は、たぶん違うと思っています。でも、Gold OAの時代が来ても、何らかの方法で学術情報流通の当事者として、これからも中に入っていきたい。今回のセミナーでその気持ちが強くなりました。



西園由依(鹿児島大学)

研究成果をどこにどのように発表するか選択肢が増えただけで、「選ぶのは研究者」という言葉が何度も出ましたが、その研究者の選択の判断材料を提供する役目を果たせたらと思います。5年後のOAの様相がどうなっているか、ではなく、どう作れるか、という心構えで。



杉田茂樹(小樽商科大学)

ビンフィールド氏による「OAメガジャーナルの成長は現存有料誌の9割を駆逐する」との将来予測を支持します。

それっていったいどんな世界？

私たちに課されたのは、SF作家が未来像を造り出すような想像力で、それを一所懸命想像し、仕度にとりかかるとだと感じました。



鈴木雅子(旭川医科大学)

PLoSは非営利団体として真摯にOAの興隆を目指していると感じた。今後APCは値下げとなると明言した点は、「APCは値下げとならない」「購読料モデルの雑誌はそのまま残る」と答えたNature Publishing Groupとは一線を画す。購読料モデルの雑誌は残した上で、加えてお金の取りっぱぐれがない著者支払モデルのOAメガジャーナルを発刊する商業出版社は、単に流行に乗って、更に高等教育機関から金儲けしようと考えているだけではないか？激しく憤りを感じた。Choose PLoS ONE!



逸村 裕(筑波大学)

「査読」はどうなるのか？その先の「評価」はどうなるのか？そして大学組織の一部としての「図書館」は何をしなくては行けないのか？といういろいろ考えさせられました。



守屋文葉(JUSTICE事務局)

ビンフィールド氏は、OAジャーナルの「健全な競争」によりAPCはむしろ下がると発言していましたが、はたして、PLoS ONE以外にも同様のメガジャーナルが複数でてきて、それぞれが投稿処理の速さやAPCの額で競うような(どちらかといえば経済合理性に基づいた)状況が訪れるのでしょうか？たとえ全ての論文がOAジャーナルから刊行されるようになっても、インパクトファクターやその他ブランドが生き残る限りは、結局APCの価格問題に行きついて投稿格差ができるのではないかと思います。ただ、読者の立場としてはすべてがOAになった方がもちろんよいので、まずはその視点で図書館も振る舞えばいいのかもしれません。先のことは考えずに。



山本和雄(北海道大学)

PLoS がその名のとおり Public Library of Science に成長していくようで、興味深いイベントでした。University Library もその名のとおりに成長していきたいものです。



内島秀樹(金沢大学)

コスト低減とOA、すなわち読者としての研究者及び投稿者としての研究者と、雇用主としての大学や助成団体(APCの払いもとの一つ)がそれぞれ相対的にハッピーになるデザインを描くことは可能かどうか、PLoS ONEを代表とするメガジャーナルの今後を注視したいという気持ちになったセミナーでした。ここに図書館が関与できるか、関与すべきか、図書館の役割を見直す意味でも興味深い講演でした。APCモデルが雑誌の支払いモデルを変えてしまうかどうかまだわかりませんが、ビンフィールド氏以外のご意見を聞くと、適正APC価格についての攻防は雑誌が自由市場の商品である限りはなくなり、交渉の場所と交渉主体はやはり必要とも感じました。



大澤類里佐(筑波大学)

読まない雑誌の購読料よりAPC、OAが実現して研究者はハッピー。Goldモデルは素敵です。機関リポジトリはその幸せが届かない分野と手を取り合っていく。そんな明日が浮かんできました。



本セミナーに参加した図書館関係者の感想です

森いづみ(国立情報学研究所)

OAメガジャーナルが、5年後10年後、どれだけ世界を席巻するか、図書館の命運と無関係ではないと実感しました。
#この群雄割拠な学術出版界に転職して、修行してみたい。図書館に戻ってこられるならば。



土出郁子(大阪大学)

「OAメガジャーナルは学術研究の質を向上させるか？」には、YESと答えておきたいです。ネット上に幾多のメタデータがあれど、最終的にその本文に行き着けるかどうかが最重要です(だからILLが発生する)。その価値判断は今でも利用する人が行っているはず。



野中雄司(室蘭工業大学)

OA論文が高い比率で実現した場合、図書館の研究支援の役割は大きく変わるのではないかとうっすらおぼろげに思っていました。ビンフィールド氏の近年には高い割合でOA論文となるだろうとの話を聞いて、仮に大胆な予測だとしても我々ははやい時期にそのような世界が来ることも想定した新たな研究支援(必要か必要でないかも含め)の形を考えなければならないのかなと感じ、ちょっと焦った気持ちになって帰ってきました。さて。



森石みどり(大阪大学)

メガジャーナルによって、ただでさえ論文を読む時間も減っている研究者の方々は読むべき論文を読む前に予想しにくく、ますます忙しくなりそうです。それでも、発行までのスピードとブランド(IF)を求める人に大きな魅力なのでしょう。セミナー中は興味深く楽しいばかりで、知ったことを研究者に伝えたいと思いましたが、伝えることによって研究者の方にどのような行動を期待しているか、等考えて、わからなくなってしまいました。評価をする側に、従来の評価とは違う新たな評価方法を考えるきっかけを作れるでしょうか。



藤江雄太郎(JUSTICE事務局実務
研修生・大阪大学)

PLoSの予測どおり、近い将来ほとんどの学術論文がOAになったとしたら...それでも、図書館員の仕事はやはりあると思います。購読型から著者支払い型OAへと大きな変化が予測されるように、今後もまた学術情報流通の世界には今では予想もつかない大きな変化が訪れるかもしれません。そういった大局的な状況の変化から目下のAPCの価格設定まで、常に注意を払い、おかしければ「おかしいぞ」と声をあげる存在として。また、全てがOAになっても、Web上には莫大な情報量があり、利用者が目的の情報にたどりつくのは容易ではないと思います。そういう情報を整理する存在として、また適切にナビゲートする存在として。「生き残る」という消極的な表現ではなく、「こんなこともできるぞ」と積極的に時代に沿ったサービスを提供していければ、と改めて思いました。



大園隼彦(岡山大学)

今後、購読モデルから投稿モデルが主流に変わっていくとしたらどうなるのだろうか。購読モデルは少なくとも機関購読、個人購読、pay per viewの選択肢があり、それにILLやIRも加えて柔軟な選択が可能といえる。投稿モデルを考えると、少なくとも研究者は論文を投稿しないという選択肢はとれない。出版社は費用が掛かる査読モデルを今後も続け、将来的にはAPCが上がる可能性を示唆している。研究者も査読による質の保証を求めているように感じる。商業出版社は購読モデルのような柔軟な投稿モデルを提供してくれるのだろうか。図書館はILLやIRに変わる機能を用意できるのだろうか。



三隅健一(北海道大学)

これまでどおりの品質が保証されていない点で、読者からの支持はどれだけ得られるのでしょうか。研究者はOAメガジャーナルへの投稿もするし、読みもするけど、それとは別に品質保証された雑誌を購読する、というやり方は今後も残るのでは？(10%にはならない)と思います。



浅野 泉(旭川医科大学)

かつてOAを知った時、これは学術情報を求める研究者にとって素晴らしいことだ！と思ったけれども、OAメガジャーナルの事を知って、これが本当に研究者のためになることなのか、分からなくなりました。医学の研究者は、いつでも「重要な論文だけを読みたい。何が重要なかがすぐに判ればいいのに」と思っていて、沢山のジャーナルの山から宝探しをすることにはうんざりしているようなので、正直、論文が爆発的に増加するのはありがたいような気がします。しかし、OAメガジャーナルは、読む側にとっては厄介な存在かもしれないけれど、書く側にとってはありがたい存在なので、研究者たちがどう捉えていくのか、今後の変化を見てきたいと思います。



南絵里子(小樽商科大学)

講師の方々への質問の多さから、出版業界からOAメガジャーナルは、かなり注目されていると実感しました。社会科学系のOAメガジャーナル、SAGE Openもあるということですし、研究室訪問の際、話題にしてみたいと思いました。

